



謠曲拾葉抄

江口 葛城 揚安記 半部 夕類

六



江口



江口在其列西生郡中嶋世寅河端父三近世一宇と建  
 立して。寺名小普賢菩薩と安一。普賢院  
 と号す。江口の表乃西流あり。其色よ小と比さ  
 云表瀬一多多野之紀乃云鳥丸資慶の跡は流色り  
 程小。依たちの宮と一里半あり。川のあふ小と表  
 の乃くくらい江は也。遊女乃廢跡とをんあるを  
 かんとて。指しせをよりぬ。川堤と一町半ありて。  
 弓ののくらいよ二回はるの堂あり。普賢堂  
 あり。表ふかりうり碑ありていんハ弥陀  
 の名号とをんて。そト小世をいふんとり表

江口



子のりり六根淨の四徳とゆらりとつた。生力の  
 普賢菩薩とぬきまぬきぬきと眼と七日の  
 かり。七月の曉天童ありて室の遊女が長者と  
 かうのりり色くをまの普賢なれとまめーてう  
 せぬ。夜のもく小室の長者があふりく。宿り  
 けし長者出合。政政くこ人よ調をとくめまうて  
 周防のりりーの法色ふゆの事候とくー  
 へい。並び居ら遊女た同をまよら流さひや  
 きりーとひひーりり。そぞ生力の普賢  
 ーやとひひ。目とあささらとあつめゆへん  
 かん柔和の生力の普賢白象ふたーゆひと  
 法性むろの大海への恒順の月乃まかりーらり  
 とくーとせゆくと。又目をあささくん色い。遊女の  
 長者とくーま多うら流さひとくーと人  
 つくー女のりーとめ限き。板つとよといてお  
 けふ経ふ。一町中をゆひくのら。此長者候よめ  
 ようりりり。遠ゆくーと年をかりりーうただ  
 きりそと生力の普賢しへあひひゆととと  
 古事談云書写上人可奉見生身普賢之由祈請有  
 夢告云欲奉見生身普賢者可見神崎遊女長者依  
 行向神崎相尋長者家之処只今自京客群来遊宴  
 乱舞之間也長者横座居執鼓拍子之上句詞云周

江口

月昔のな  
るに世の  
いづくか

防じろづくのゆらぐえく井の川いりり

○月一昔

○思出物

○月ノカレモ

○心ノアルテカシ

○世ノ外ノイツク

○心ノ外ノイツク

○月ヲナヤド

○カハテマシ

○也

其時聖人成奇異之思眠而合掌之時件長者應現  
普賢之白象六牙白象出眉間光照道俗以微妙之  
音声説曰實相并漏大海五塵六欲之風不吹墮縁  
真如之波不立并時云云其時聖人信仰恭敬拭感  
淚開目之時又如元為女人之白彈周防室積給用  
眼之時又現菩薩形演觀法文如此數ヶ度敬礼之  
後聖人涕泣退帰于時件長者俄起座自閑道追来  
聖人之許示云不及口外即逝去于時異香滿宜云  
長者俄頃滅之間遊宴醒真ラ已上東女隨事同之

月とよは

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

あか

私云此後いぬは法師の口の遊女よ名うらなふゆ  
性空上人室の遊女普賢のりりとかうせんゆふゆ  
此二名小依くゆらるる也。徳の妙終い皆あは法  
師のゆふゆゆらるる。今葉室の遊女の據の  
室よゆらると。周防小室積ホツミ。則ナ室積小普賢堂を  
なするの普賢井出現於海中此不昔の紅付と遊  
女とあり。鹿苑院准后義満公嚴嶋詣記云源貞世  
之作  
周防小室つとくと云ふゆぬびりー生力の普  
賢のそつがわうせんとかうひらる人ふつげ有る  
是こそ生力乃普賢よとて。此不の遊女とわく  
りるゆらるる。不のゆらるるゆらるる。

もくさうりしとて。そむくつらむとてさうじ  
つねに抱じらるると云ふは昔あひさうりては  
うとくあくまうりし

あはれあはれ  
あはれあはれ  
あはれあはれ

撰集抄よ性を上人。室の越中つらひ。周防公室  
積の越中つらひ。又あはれつらひ。作家の  
越中つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ  
つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ  
月いじりのあはれつらひ。世の介りやうら  
閑居のあはれつらひ。世の介りやうら  
つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ  
つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

信田村津ふいさ。夫五ちい富士を鼓。流ハ融氷流を  
▲やう殿の芦の下のさくさく。やう殿の在。撰別傳上。歌

上牧村之曲。親長卿記云文明十五年四月廿三

日早且飯京自後部兼船及晩雨下宿宇殿。矣

さうりつらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

つらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

。世中ようこのの芦のの。とてさうりつらひ。又あはれ

た乃煙の浪とてさうりつらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

ある松の煙とてさうりつらひ。又あはれつらひ。越中つらひ。又あはれ

木の煙とつららるる。夏小くも木の煙はねあき  
 自色冬の煙冬ともなり。奥をさへし。とちをたのらる  
 とらるる。松葉子とちあひらるるのり。  
 車くさくさしぬのらるるのり。  
 住之とち舞火。おねとちねとちこと。  
 木の煙は舞火ゆほ。江口の里いよは。  
 又又法法及及龍龍前前よ名名あり。  
あらしむにふさくはくといふ毎小田路

▲板板いもるういぬの君乃四四なりや  
む

あな

西行上人の時  
 分江口  
 たり後文成  
 へし

乃不不きして君の名とあめゆひと。さし遊君の遊  
 帰帰りりりり  
ヨリ翼翼賛賛云一書よ孫孫女女が家の長がえ紙  
 と注しとく小ねの大王の娘宮宮王王新新加加陵陵風風芳芳と云  
 有有りり江口に神清室去庫の傾傾かこの末末ありと  
 古今集才八八難難邪邪音音不不ありめとくは後人後も。  
 新撰新奇奇松松云古今作者作白白女女江口の遊女遊とと又又女女  
 の中中あり。夏夏異異天天空空澤澤あひ人人こと。  
 古今素純抄云松女あらめ。大江のなまがらがあ  
 とも  
 草木物草物物譜譜云後三後象象院院後後在在るる時時江口  
 の松松び二二船船あり。緑緑々々とれりせりたり  
 大和御大御御云亭子亭の江口河尻河又又ありしりりして

うりていふふあつていつふのあつていつふのあつて

白氏之集云  
遺文三軸軸

金玉声アリ  
龍門原土  
埋骨不埋  
谷ヲ

今案あつていつふのあつていつふのあつていつふのあつて  
つろいふと云ふは、蓋女の趣多し、すも、顔と  
りやと云ふは、今世の白人と云ふも此、彼小  
まづりていつふのあつていつふのあつていつふのあつて  
まづりていつふのあつていつふのあつていつふのあつて  
まづりていつふのあつていつふのあつていつふのあつて

源氏供養不詳と

百練抄云保延六年十月十五

日西行法師出家矣 為の系湯ハ為の橋ノ下ニ

法師者 十住昆婆沙論云應行四法名法師一廣

博多学能持一切言辞章句二決定善知世間出世

間諸法生滅相三得禪定智於諸經法隨順并諍四

不增不减如所説行矣

職原云法師位准四位太法師准三位矣

世にいつふのあつていつふのあつていつふのあつて

新古今集釋撰抄云為の法師云

詞云云天皇守一もつてゆりたるふ、傳ふる、傳ふる

いふりたるふをうりたるふ、いふりたるふをうりたるふ

ゆりたるふをうりたるふ、若し、若し、若し、若し、若し、若し

長柄をうりたるふ、天皇守一もつてゆりたるふ、天皇守一もつて

と、ゆりたるふをうりたるふ、若し、若し、若し、若し、若し、若し



のゆゑにやうなるまじりたる。せめては後の名ありの如  
ひやうにまじりたる。送橋寄寓後  
命シきく後の名ありしよし

▲あつくあまのりた信 音義云倉傳夷語相呼声ト

實其をまの 劉禹錫傳云鼓吹裴回其声倉傳ト矣

▲世といふ人といふけの後の名ふんといふやうに

新古今集ふ遊世の妙タがしありまこと。右の如りの  
ふのまじり。上のふ文字。撰集抄及ふ家集の  
にあとあること。ふのふのいせとのりれ。あとお  
るへにすうしふ。後の名ありふんとあへく。名  
ありはまじりといふこと

▲採りもあふか色女のあふしと埋本の人も色女  
ゆのこもまじりあふ 古今後字序を色女のあふ  
埋本の人も色女ゆとありて

関守小町トは。名ふあふといふ名付たるら  
古今採雅抄をあふあふくふ付く。仏牙ミよ  
大花根の人あり。あふをまじりて。名とあふよ  
負ミくつりたるら。名とあふよ。名とあふよ。名とあふよ。  
墓カしりせたるら。名とあふよ。名とあふよ。名とあふよ。  
うらうら。色このののの字とあふよ。名とあふよ。

二字たふ。男女の英稱ふ浪し。  
説文曰色顔気也矣 詩序疏云謂女人為色矣

人形遊覧見  
韻會云好於文女子為好矣  
人形遊覧見  
ト云々

説文曰好美也双女子徐日子者男子之美称也  
韻會云好於文女子為好矣  
人形遊覧見  
ト云々

流遊女  
ヨルカハカ  
流遊女

河隈

隈の字の得くよほを

水ノタケ入江ヨドシ  
水ノタケ入江ヨドシ

我名の花乃きくらばやえつらんあいの介小  
拾遺集春部平兼盛云

羽衣之冷泉院は屏風の繪も梅の花あるあふ  
客さうるあふさうさうの  
あいのゆふさうさうの梅の立枝のゆふさう  
らんをさうさうさうさうさうさう

昔  
三遇樹下  
新巻後世  
破遊一知  
成不遊  
河之流  
汎テムモ

二樹の傍ふ宿りらん又ハ一河の流の水 千壽は流を

遊女のさうさうあふさうさう 遊女は二葉あり一よの遊女

と名付くあふさうさうさう人の遊真とさうさうのな

まの遊女とさうさう 葉た相映え口のゆさうさう

斗あうて。縁をさうさうさうさう

藤垣のふ遊女とあふさうさうさう。一ふの遊女のゆくと

しむし。遊りさうさうさう。倭名抄云揚氏漢語抄

云遊女遊行女兒也一云晝遊行謂之遊女侍夜而

發其淫奔者謂之夜發矣

或ハ花女とさうさうさうめ。さうさうさうさうさうさうさう

かたはつとてまたもいさめと云ひたりかこの女

と云ふ也

浮世草子

○河の洲小浪の浮世をうりわたりつらむのさるれん

唯識論云

未得真河舟と云く

瀬上は

瀬下は

瀬中

瀬下

瀬上

瀬中

瀬下

瀬上

瀬中

瀬下

瀬上

瀬中

瀬下

瀬上

瀬中

瀬下

瀬上

瀬中

瀬下

瀬上

瀬中

瀬下

娘の橋下の娘大明神と一柱と云々

橋下河原へ

古今集恋にふみ入らるる

小庭よ衣行敷今宵のや我と侍らん空路の橋下

兼雅おえせりて遠よ夜を行敷とく今宵も

空路の橋下の我と侍らんと云。伊和よの恋

と人よありそのと侍んと侍り句をぬりて

空路の橋乃モトり小娘と侍りておとと侍り

空路の橋下と云。そのたより人空路のふよお

いとる。離宮と一柱のりよひ侍りふりて

中畧 隆縁と侍る大明神の空路の橋下小

よひ侍りてと云。物色と云々もさへ

橋下河原と云。一妻二人のりりり男。本妻の

つりり。七枚の和布と侍りひおる。海色

よりと龍王ふりてと云。夫ふりり。本妻は

河原の小。淡色なる唐ふりり。かのつり

此男ふりり。さむし。小衣行敷のふりを

視る。海色よりと云。さむし。さうて

やうをりて。めふりて。侍り。今宵の書

此子を安て。始のことと云。此男と侍る

此子をうりて。さむし。さむし。さむし

さむし。本妻と侍るふり。侍り。さむし

エロ

正



秋、水三言、ギル、秋、水、三、言、ギル、秋、水、三、言、ギル、秋、水、三、言、ギル、  
かま、ス、物、味、三、言、秋、水、三、言、

もあ——と、りく句を切て、以て後せば月ひびり  
 けくひてふとふり——り、但、あ——と、り  
 秋のあ——る、ぶり、あ——る、さ、り、舟の  
 和漢朗詠集云、郢展詩云、秋水漲來舩去、速、夜、雲、收、  
 尽、月、行、遲、云、カ、都、行、時、一、月、カ、早、ク、リ、ハ、  
 月も、新、々と、棹、の、あ、西材集云、さ、り、の、あ、ハ、舟  
 さと、人の、あ、こと、く、東國紀、云、秋、の、舟  
 乃、棹、の、あ、の、松、乃、乃、不、喜、ウ、ト、ツ、ク、ト、ク、  
サ、多、ク、コ、ト、リ、カ、サ、カ、コ、ト、リ、左、太、沖、吳、都、賦、云、方、舟、結、駟、唱、棹、又、云、權、謳、唱、  
 又、云、權、謳、唱、サ、ホ、ノ、ウ、タ、ト、キ、

箫籟鳴、呂向註曰、棹、鼓、棹、行、而、歌、也、矣

く、く、く、の、あ、い、と、夕、秋、ハ、は、と

夫十二、周、縁、の、流、博、ハ、車、の、庭、小、廻、が、如、く、多、の、林、小、  
 遊、ハ、似、く、六、道、講、式、云、流、博、在、窮、如、車、廻、庭、昇、沉、  
 不定、似、鳥、遊、林、兵、十二、周、縁、ハ、圓、覺、徑、ハ、流、ル、、  
 毎、明、二、ハ、行、三、ハ、識、四、ハ、名、色、五、ハ、六、入、六、ハ、觸、  
 七、ハ、受、八、ハ、愛、九、ハ、取、十、ハ、有、十一、ハ、生、十二、ハ、老、  
 死、ハ、十二、と、せ、ふ、く、く、ら、因、と、縁、と、ハ、後、く  
 果、と、ゆ、る、る、車、の、庭、ハ、廻、が、く、く、く、と、こ、十二、  
 周、縁、ハ、亦、く、名、義、集、ハ、み、く、く、り、累、之、  
 ▲、生、ず、く、あ、生、曾、く、ま、す、の、あ、と、あ、く、と、あ

世に於て也夫くよ世々のの終りといふはるるに  
愚迷發心集云鎮墮三途八難之惡趣所尋苦患而  
既失發心之謀或時適感人中天之上善果顛倒迷  
謬而未殖解脱之種先生亦先生都不知生々前來  
世猶來世全在弃世終矣 秘藏宝鑰云生生生間生始  
死死死死冥死終矣 是より以下後心の媒と  
しるふと云と。後心集といふとつていふ  
或人中天との善果と云とつていふも

地獄餓鬼畜生修羅人間天上との此の中あそん  
中天上ふせりといふ善果なるも迷ふといふか  
誰とえのこし 竹馬経云依五戒十善四禅

八定功勳力而得入中天上善果雖然善惡二業共  
是有為法而未離三毒之窠窟矣

▲顛倒迷妄——未解脱の終といふと

弘決曰顛倒者顛頂也頂墜於下故名顛倒矣

迷妄いみじかりといふやういふに。るるといふ

とふふゆらゆらと。顛倒迷妄といふ。解脱ハ

とていふやういふと。譬喩品云但離虛妄

名為解脱其實未得一切解脱矣

▲或ハ之途八難の區趣に墮——て

淨心誠觀云四百四病以夜食為本三途八難以女  
人為本矣 三途といふは。一は火途。地獄也。

エロ

ハ熱の火不焼くとも二血途畜生也肉骨  
血と食とと之より刀途餓鬼也刀杖驅逼して  
刀杖をぶらおかりんく若くともくろく

西域記云春秋有三途危險之处借此名塗猶道水  
謂塗炭義也 血途といふ即之塗の又と

名義集云梵語云阿波那伽低經音義此云惡趣有  
三惡趣亦名三塗 八難ハ八ヶ所の障難あり不  
と云ふ

金光明經云一心輕躁難二近惡友難  
三有障難四三毒難五遇益難六值好時難七修  
功德難八值佛亦難 淨名經ハ難ハ一地狱二

餓鬼三畜生四北爵草越五長壽天六佛前佛後七  
盲聾瘖喑八世智辨聰 又旁外の八難といふ

大教法救及普賢記等よあはり

▲苦患よとらさく泣きぬるの媒とくく

人間一生の内多くとらさくかてと苦患縁  
よとらさく喜提と添りよとらさく

と後集よハ媒とあふとと媒謀文字お  
似きんハ去のやもりる也但し

苦患及鐵 玉篇云鐵口渙切燒鐵矣

字彙云口喚切寬去声矣 発心發菩提心中畧也  
智度論云発心菩提於益量生死中發阿耨多羅三  
藐三菩提心故名爲菩提



五律三首  
後世  
二十五年三月  
廿五日

病るは我等適受難なる人かを更らりて之尤眼  
業流とてめとせよ 適受難と人あふせんらふ

男とていふべしとて飛流とて女の男とせよとて  
四十二章経云離惡道得為人難既得為人去女即男難

○世の悔あやのうをさるる難とて又いふるあやふ

ことふあゆりしとてあゆりし河竹の流るの女とる  
え乃世のじらひまてかりひやうとてあゆりし

飛流とてあゆりしとてあゆりしとてあゆりし  
あゆりしとてあゆりしとてあゆりし

あゆりしとてあゆりしとてあゆりし  
詩周南云漢有游女不可求

法花安樂行品云取肉自活街賣女色如此之人皆

勿親近 矣 万古源云河竹の流るの女とて

通材集云河竹の流るの女とて 又流るの女とて

又川の流るの女とて 伊呂波字類抄云皮菌と

遊女と流るの女とて 流るの女とて

た〜〜 一生あゆりしとてあゆりし

本朝文粹以言見游女詩序云維舟門前遲客河中

○河竹の流るの女とてあゆりしとてあゆりし

あゆりしとてあゆりしとてあゆりし

あゆりしとてあゆりしとてあゆりし

あゆりしとてあゆりしとてあゆりし

江口



三ノリノカ  
ガリシヤ  
イヤ

於煙巖之阿矣 普化和尚云我家尺八本在孔者  
意吹時敢不鳴正是松風蘿月夜君於曲處試斯声  
矣 普化ハ五燈ヲ三盤山宝積弟子也

翠帳紅圍之花とるく一妹背もつらのすふくた  
つらん ちの絡繰るるふくそつりせのことく

くくひとるくつらん 以言遊女序云翠帳紅圍万華之礼法

雖異舟中浪上一生歡會是同矣

凡らるるもよま情のり人偏ゆき名を道へさうい  
あひまらるる 有情非情たふなき夢の乃れい  
のうらうらとあひまらるるも色ふとみまを

つて念をさうとく 歐陽永叔秋声賦曰嗟夫

草木有情有時飄零人為動物惟物之靈上下界

眼其也  
六根六境  
心若也

有阿ら色ふとく 貪念のありひ後うく次  
譬喻品云於諸欲深貪著深故是以方便為説三衆  
矣 法花懺法云衆生无量世以來眼根因縁貪著

諸色以著色故貪愛諸塵矣 佛祖三經曰佛曰愛  
欲莫甚於色色之為欲其大無外矣 詩序疏云女

有美色男子悦之故經傳之文通謂女人為色矣  
又有阿ら夢とく夢覺枕のふくしと夢さくふあひいふ

いふ夢の縁とらる物と 色ふとく夢をさす  
皆そ六根よりさうとく 戒ハ身口意の三業

皆妄相顛倒の因縁とらるべし。

私之妄染とらるべし流るるは物とす。妄相いと不

りふりてあまの事言るる人。

▲妄や皆人の六塵の境ふらふは六根の飛をばり

るもつらるる事よまらふんらるる。

六塵とい色多々香味觸法也六根とい眼耳鼻舌

身意也。境とい境家こ。常よ何れ六根に對する

おもこ。起信論云三界虚偽唯心所作離心即無

六塵境界矣。三藏法數云六塵出涅槃經塵即深

汚之義一色塵謂男女形顏色等二声塵謂男女歌

詠声等三香塵謂男女身分所有香等四味塵謂肴

饍美味等五觸塵觸即着也謂男女身分柔軟細滑

等六法塵謂意根對前五塵而起善惡諸法矣。

▲實相益漏の大海よ五塵六欲の因いなり。凡縁

ま如の浪のうねりもなり。

普賢菩薩室の遊女と現じ。此法文とて流く性

之と人よあし終あこ。古事決東缺隠象。

抄等よ載らる如。是よ月ト。又撰集抄よ此也

るい此文よ是なり。

實相の法花方便品曰諸法實相矣。

文句疏口實相者是實智境。下理非虚故言實相矣。

法花論云言實相者謂如来藏法身之體不變義故

法花論云言實相者謂如来藏法身之體不變義故

エロ

多漏とい漏ハ怛憍の多シ 俱舍頌疏云漏謂煩  
惱<sup>モスラキヤラ</sup>泄<sup>シ</sup>過<sup>ル</sup>在<sup>ラ</sup>窮<sup>ト</sup>煩<sup>ト</sup>惱<sup>ト</sup>名<sup>シ</sup>漏<sup>ト</sup>矣 成實論云失道故名漏  
矣 漏の字いりりてく<sup>レ</sup>何<sup>レ</sup>ぞ<sup>ノ</sup>迷<sup>シ</sup>ひ<sup>よ</sup>り<sup>ハ</sup>れ<sup>ル</sup>と<sup>テ</sup>実<sup>ニ</sup>お  
そ漏<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>こ<sup>ト</sup>此<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>漏<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>由<sup>ニ</sup>体<sup>ト</sup>と大海<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>喩<sup>シ</sup>く<sup>テ</sup>此<sup>レ</sup>亦<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
去<sup>ル</sup>如<sup>ク</sup>の<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>ケ<sup>ル</sup>也<sup>ト</sup>。

五塵とい右の六塵の内。法塵をのぞくと<sup>ス</sup>。所<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>みつ  
と<sup>ス</sup>こ<sup>ト</sup>。六<sup>ノ</sup>欲<sup>ハ</sup>ハ<sup>レ</sup>彼<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>根<sup>より</sup>起<sup>ル</sup>る<sup>所</sup>の<sup>レ</sup>欲<sup>ハ</sup>也<sup>ト</sup>。

隨緣<sup>去</sup>去<sup>如</sup>者 起信論疏云法藏師云真如有<sup>二</sup>義  
一者<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>變<sup>義</sup>二者<sup>二</sup>隨<sup>緣</sup>義<sup>ト</sup>矣 筆削<sup>云</sup>隨<sup>緣</sup>者<sup>レ</sup>隨<sup>染</sup>汚

順<sup>流</sup>而<sup>成</sup>九<sup>相</sup>矣 隨<sup>緣</sup>去<sup>去</sup>如<sup>と</sup>譬<sup>ハ</sup>浪<sup>ハ</sup>水<sup>に</sup>従<sup>フ</sup>  
波<sup>ノ</sup>忽<sup>然</sup>の<sup>レ</sup>動<sup>ル</sup>其<sup>レ</sup>波<sup>ノ</sup>乃<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>千<sup>波</sup>万<sup>波</sup>と<sup>ス</sup>る<sup>所</sup>其<sup>レ</sup>波<sup>ノ</sup>の

体<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>水<sup>なる</sup>が<sup>ごと</sup>く<sup>し</sup>去<sup>去</sup>如<sup>ハ</sup>本<sup>湛</sup>然<sup>と</sup>相<sup>當</sup>  
身の<sup>なり</sup>也<sup>ト</sup>。去<sup>去</sup>明<sup>の</sup>縁<sup>不</sup>絶<sup>て</sup>。人<sup>畜</sup>も<sup>よ</sup>ら<sup>ぬ</sup>との

方法<sup>と</sup>する<sup>所</sup>。其<sup>レ</sup>方法<sup>の</sup>体<sup>ハ</sup>え<sup>去</sup>去<sup>如</sup>こ<sup>と</sup>よ<sup>し</sup>の<sup>レ</sup>縁<sup>不</sup>

絶<sup>く</sup>方法<sup>と</sup>別<sup>く</sup>也<sup>ト</sup>。其<sup>レ</sup>体<sup>ハ</sup>金<sup>ま</sup>如<sup>く</sup>て<sup>あ</sup>る<sup>所</sup>に<sup>は</sup>

隨<sup>緣</sup>去<sup>去</sup>如<sup>の</sup>い<sup>へ</sup>ん<sup>所</sup>。去<sup>去</sup>如<sup>者</sup>自<sup>性</sup>真<sup>実</sup>の<sup>レ</sup>体<sup>を</sup>括

く<sup>る</sup>也<sup>ト</sup> 唯<sup>識</sup>論<sup>云</sup>真<sup>謂</sup>真<sup>實</sup>顯<sup>非</sup>虚<sup>妄</sup>如<sup>謂</sup>如<sup>は</sup>  
常<sup>表</sup>去<sup>去</sup>變<sup>易</sup>矣 起<sup>信</sup>論<sup>云</sup>心<sup>真</sup>如<sup>者</sup>即<sup>是</sup>一<sup>法</sup>界

本<sup>體</sup>相<sup>法</sup>門<sup>體</sup>所<sup>謂</sup>心<sup>性</sup>不<sup>生</sup>不<sup>滅</sup>一<sup>切</sup>諸<sup>法</sup>唯<sup>依</sup>  
妄<sup>念</sup>而<sup>有</sup>差<sup>別</sup>若<sup>離</sup>心<sup>念</sup>則<sup>在</sup>一<sup>切</sup>境<sup>界</sup>之<sup>相</sup>是<sup>故</sup>

一<sup>切</sup>法<sup>從</sup>本<sup>已</sup>來<sup>離</sup>言<sup>說</sup>相<sup>離</sup>名<sup>字</sup>相<sup>離</sup>心<sup>縁</sup>相<sup>畢</sup>

竟<sup>平</sup>等<sup>無</sup>有<sup>變</sup>異<sup>不</sup>可<sup>破</sup>壞<sup>唯</sup>是<sup>一</sup>心<sup>故</sup>名<sup>真</sup>如<sup>矣</sup>

竟<sup>平</sup>等<sup>無</sup>有<sup>變</sup>異<sup>不</sup>可<sup>破</sup>壞<sup>唯</sup>是<sup>一</sup>心<sup>故</sup>名<sup>真</sup>如<sup>矣</sup>

竟<sup>平</sup>等<sup>無</sup>有<sup>變</sup>異<sup>不</sup>可<sup>破</sup>壞<sup>唯</sup>是<sup>一</sup>心<sup>故</sup>名<sup>真</sup>如<sup>矣</sup>

竟<sup>平</sup>等<sup>無</sup>有<sup>變</sup>異<sup>不</sup>可<sup>破</sup>壞<sup>唯</sup>是<sup>一</sup>心<sup>故</sup>名<sup>真</sup>如<sup>矣</sup>

公とあど、浮世もあつて一人もあつて、いづれをわも  
うく別路もあつて、いづれはよどひもよどひ、月名のみ  
しもあつて、いづれをわ

もあつて  
のあつて  
浮世もあつて

此世を彼の宿りてあつて、いづれをわもあつて、  
もあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
別路もあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、

休

おのいづれの宿りてあつて、いづれをわもあつて、  
いづれの宿りてあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、  
いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、いづれをわもあつて、

来る  
る去りて来る、  
来る去りて来る、  
来る去りて来る、

普賢菩薩ハ 法花丈句云太論觀經同名遍吉此  
經稱普賢兵 又云伏道之頂其因周遍曰普勸道  
之後隣極聖曰賢兵 悲華曰我誓於穢惡世界行

江口

菩薩道使得嚴淨我行要當勝諸菩薩寶藏佛言以  
是因緣今改汝字名曰普賢矣 法花普賢行願品  
云欲修習此法花經於三七日中當一心精進滿三  
七日已我當乘六牙白象與並量菩薩而自圍遶以  
一切衆生所喜見身現其人前而為說法示教利喜  
矣 明眼論云普賢座白象者用法身各色止行矣  
四声字苑云象獸名似水牛大耳長鼻眼細牙長者  
也矣 虞衡志云象出交趾惟雄者有兩長牙頭不  
可俯頸不可回口隱於頤去地尚遠運動以鼻為用  
一軀之力皆有鼻將行先以鼻拄地以移足鼻端深  
可以開闢取物每以鼻取食飲水亦以鼻吸而捲之

足如柱矣指而有爪甲形如栗登山涉水甚拙出象  
山矣

▲先と共ふ白妙の白まよくらりのりて 雨のそより  
莊子天地篇曰乘彼白雲至干帝鄉矣 ゆる有對  
白妙ハ田村よびと

高き山に登りて白妙といふものと澄むる河のそよくらり  
とていふたれとをいふるをいふ

葛城

葛城神社在大和国葛木上郡葛城山所祭神一座  
 号一言主命 旧事本纪云葛木一言主神坐倭国  
 葛上郡是素盞鸣命神子也矣 日本纪十四云雄  
 略天皇四年二月天皇射猎於葛城山忽见长人来  
 望丹谷面貌容儀相以天皇天皇知是神猶故問曰  
 何処公也長人對曰現人之神先称王諱然後應導  
 天皇答曰朕是幼武尊也長人次称曰僕是一事主  
 神也因名号一言主之太神下畧 旧事天孫本纪  
 云火々出見尊十三万六千年時速刺利主神又云  
 一言主住葛城国其葉好妾生一美女云速刺等媛



葛城

心情太柔輒父神搖之タカラ余時從天降高震鬼神擊ツク一言主神一言主神聞與鬼神雖不至死悉所爬斬成カキ凝黑身成兒怖醜不能會見於諸神等ニ矣

葛城といは降峯のふりり号金剛山本朝七高山、  
其一也山上は葛城の神社と云ふといふ所のふ  
令剛山の寺あり時法悔すと云ふといふ所あり、  
古の河内小属せり。旧事国造本紀云檀原朝御

世以劔根命初為葛城国造矣日本紀云神武天  
皇己未春二月高尾張邑有土蜘蛛其為人カキ也身短  
而手足長兵侏儒相類皇軍結葛網而掩襲殺之因

改号其邑曰葛城矣葛木室山記云一言主神飛  
行夜又所變号孔雀王一乘無二法守護之故名二下  
言主尊故當処名二一乘峯又謂神祇室山峯矣

詞林采葉云此山ハ過去迦葉佛説法の乃場今ハ  
室茲菩薩の法加ハカり昔堅真和尚大年中ハ  
後我躬手城宮ハ入修スとて此山と名スと云レれ

ふふ布薩の鼓の安えりといふありといふ  
ふふの鬼キと鼓と云ふ和尚問テ云いりりり  
湯と云ふ昔迦葉説法の処今ハ有室ハ在  
浄土也云々

神のじり一乃跡とありて葛城山ふふありん  
一言主の神ハ神代より葛城山ふふありん

あふ律のじうしんく

△是ハ出羽の羽黒山カサより出づる山伏カサなり

出羽国ハ旧事本紀云諾羅朝御世和銅五年割陸

奥二郡始置此国也矣 拾芥抄云或説云大室元

年辛巳始置矣 大和本紀云出羽山奥列の因

允恭天皇の神代小磐の羽と神淵物カサ備へ

奉りり小磐カサありて彼羽のあら妙小準

へ小羽と名付給ひしと又彼山の中ふ

賀鷹カサ夷子鳴りしと云也 磐の會位カサなり

羽黒山権現ハ在最上領所祭神一座入倉稻カサ鬼神

推古天皇元年出現社領十五百石羽黒月山湯殿

三山為一坊舎三十一院山伏之住家數十軒在麓

山伏ハ亦指し流と

△條カサ忽カサの能カサあそりカサの

修験抄云夫鈴繫者金胎两部直質入峯修行法衣

也秘記曰鈴繫者鈴也鈴者南天塔カサ婆衆生躰性也

五古形金五智下八葉胎藏也表金胎不二自性法

身説法故鈴者行者之六大法性真如宝王也以法

性真如玉繫两部直質之衣修行金胎本有一衆菩

提之峯故号鈴繫法華云以無價宝珠繫其衣裏カサ

以是可觀知黑色真如不變之義也是則心性不動

無拍法身位也二露者愛深不動之二明王也行者

大日也。是為一佛二明王。秘觀一矣。

△ふ又ふの糸橋よはもと大和の田村よはとてふふくいの  
ふふふはとて

△ものがさうふりさうれく とも唱しや

○おのりううゑとてい新くは名のふとふとまうふはの中

△夏の小の常法より 常法の小日新のうとて

あそこと

○<sup>第千</sup>免ふんり寄るるはし小倉のやりの常法小森と馬

△登の重一 吳山のる鞋の香一 楚地の花

<sup>楚地を花</sup>

詩人玉屑云。閩僧可士有送僧詩云。一鉢即生涯。隨

緣度歲華。是山皆有寺。何處不為家。笠重吳天雲。鞋

三山為一坊。舍三十一院。山伏之住家數十軒在麓

ふ伏の小務よはと

△條<sup>ス、カケ</sup>然の神の物おとせりの

修驗抄云。夫鈴繫者。金胎兩部。直質入峯修行法衣

也。秘記曰。鈴繫者。鈴也。鈴者。南天塔婆衆生。躰性也。

五古形。金五智下。八葉胎藏也。表金胎不二自性法

身說法。故鈴者行者之六大法。性真如宝王也。以法

性真如玉繫。兩部直質之衣。修行金胎本有一衆。菩

提之峯。故号鈴繫法華云。以無價宝珠繫其衣裏。

以是可觀。知黑色真如不變之義也。是則心性不動

無相法身位也。二露者。愛深不動之二明王也。行者

大日也。是為一佛二明王。秘觀一矣。

▲ふ又ふの糸橋よほむと。大和の田村よほむと。ふふく  
いふふほむと

▲さものかふふりさうれく。さきゆしや

○かのつゝつゝさうと。いさくはさるのふふふふふ。ふふの中のふ

▲夕のふの夢ほり。夢ほの夢ふ小月歌のうしと

あとしと

○あふんの夢さるほし小倉のやまの夢ほ小森とほり

▲ささの東ー吳ふのささ鞋の香ー楚北の花

詩人玉屑云。閩僧可土有送僧詩云。一鉢即生涯。隨

緣度歲華。是山皆有寺。何處不為家。笠重吳天雲。鞋

香楚地花。他年訪禪室。寧憚路岐賒。矣

本文よ吳天、香とあるとせ。楚よの吳ふの香と

つらつら。さあませり

▲肩上笠傾。在影月。檐頭柴挿。不香花

此詩作者未考。此上句ハ無問觀の序よあつり。

不香の花の香と。侍の念田妙ふあつり

○通夜はつひもの物や。ゆふかりぬむも指またらん

▲ふ人のささも新もほりぬ。ささやらん。さささの

ささの菅家の師あつり。ふの明と

▲ささのさささ。人新菅のささ乃む。さささの

たふ記とらん。古今集の月さふささ。さささの

葛城

寄るもあつてつらう。古今竟恵抄云古  
き日本舞の形。是の昔、天照を伴天の思  
戸小間籠らせ給ひし時中畧。その時の伴天の  
例るれい。古きやまといふいとく。伴天さう  
くひしんふんこさう。古今采雅抄云大和舞  
といふ掌會よりありしこと。大和舞伴天。古  
舞といふ人。舞の形。今への舞形とて  
女のよき。昔のよきとよびしこと。後河舞  
といふも。昔より後淡小夫人の降く遊びし  
といふとよびしことありしこと。東遷といふ是を  
りあこさう。

古今集第二十大哥取流歌の形。小乃々。葛城山  
小乃々のところ。網云云。古きやまといふの  
ま。あつての標と云。日本紀より弱木林と云。  
杖のやうなる枝より新し。袖中抄云。正月初卯  
の月小夫人の杖とありしこと。杖といふ  
らあつて。甲の古きやまといふ。杖といふ。甲  
是を卯杖といふ。

古今集云。あつてのゆふのうら。この枕詞。正  
月初卯小枝と云。杖小乃々。つらう。  
あつてのゆふのうら。杖のよき。

高成

あまぐく。たふ居園は折政つとせひく。子  
年の故とてありと後始つて。まよひの世  
の心或は標シモトいつえのるこし

余はふのこり。白きやまの回りの

邦古

。まよひのこりてやまのまよひのまよひのまよひのまよひ  
此、あまぐく。まよひのまよひのまよひのまよひのまよひ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよひ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよひ  
まよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよひのまよひ

葛城や木回ふまの柳まの山依のうり火と法

捨川尻次高下まよひまよひまよひまよひまよひまよひ  
やまはまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

くくまのつとまよひまよひまよひまよひまよひまよひ  
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ  
石火のまよひまよひまよひ

世中の電光朝露石の火の 柏崎ふはま

長秋集

。石を赤光の神ふまよひまよひまよひまよひまよひ  
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ  
まよひのまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ  
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ  
まよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひまよひ

白根トウミ。〜〜〜の修トウミ行トウミ者トウミ〜  
童蒙トウミ扶トウミ云トウミ〜〜〜の依トウミとトウミ〜  
白妙トウミの田トウミ村トウミの記トウミと

白妙トウミの田トウミ村トウミの記トウミと。加持トウミの誓トウミとトウミ少トウミ派トウミと。又トウミ少トウミ派トウミの  
罪トウミの梅トウミ枝トウミ少トウミ派トウミと。咒トウミ詛トウミの田トウミ村トウミ小トウミ記トウミと

葛城ツツ少ツツくツツ力ツツとツツ〜  
舊ツツ葛城ツツ少ツツくツツ力ツツとツツ〜  
今ツツ素ツツ龍ツツとツツ熱ツツのツツ若ツツとツツ〜

旧記云役小角金峯山ト与ト葛城峯ト為ト行通ト於ト兩山ト召ト  
集衆神令ト渡ト石橋ト時ト金峯大神ト不勝ト呪ト力ト且ト作ト始ト之ト  
葛城一言主神又始作之小角呵神曰何不早成一  
言主神對曰其形甚醜難晝役待夜出故遲耳小角  
促一言主一言主不肯小角怒咒縛繫之深谷一言

主託官人曰我是管通冠之神也竊見役小角潛窺  
國家不急浴殆乎危宮人以同文武帝下勅召小角  
小角騰空飛去不得追捕官吏設計畧收其母小角  
不得已自来就囚使配豆列大嶋金山峯山縁起及釈書

今素龍と熱の若と〜  
經及俱舎蒲等小と〜  
曾ら神乃小沙汰と〜  
葛と〜一言主神と傳と〜  
と〜  
葛木宝山記云四十一代高天原廣野姫朝旻御宇  
葛木一言主神与役優婆塞互相合心合德為大法

葛木宝山記云四十一代高天原廣野姫朝旻御宇  
葛木一言主神与役優婆塞互相合心合德為大法

導師而金剛大悲弁才並尽能滅衆生煩惱遍遊國  
土以清淨法拔衆毒降伏魔縁矣

明王の索 明王とい不動明王と名寄小波と明王  
の字義ハ安寄小波と索ハ弁弁又小記と

石いひしみの神神として 宝山記云一言主神

天神降坐時坐金剛矣 百因縁云藏王御躰石像

也金峯山三尺金剛山五尺入石箱奉安置淨地底

矣 一言主神藏王権現垂跡同トハハカクハカ

黒川のうけつとハハカクハカ

ゆかひいしと葛城の神 拾遺集小ま宮ハハカクハカ

衆人た道旁と上句ハ思稿の歌乃ハハカクハカ

わくーくく河と云大細言物光下ハハカクハカ

女のりふ志のびくハハカクハカ

いひりれハハカクハカ

五妻ハ羽衣律りハハカクハカ

住ハ佛系云上正是の月世意意ハハカクハカ

法味ハハカクハカ

是ハハカクハカ

一心敬礼 佛ハハカクハカ

南岳懺法云一心敬礼十方一切諸仏ハハカクハカ

法性真如の室ハハカクハカ

千受万亦不ハハカクハカ





經教本紀云王仁曰高天原者曰天命之高性也  
其  
神系方曰道明寺少彦名。白和幣ハ竜田少彦名也。思  
戸の帯ハ三悔少彦名也

天之香久とむじろひ不<sup>カ</sup>及<sup>カ</sup>たり

香<sup>カ</sup>来<sup>ツ</sup>た<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>菴<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>と。初<sup>カ</sup>嫩<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>と

ま<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>。香<sup>カ</sup>久<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>耳<sup>カ</sup>無<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>。田<sup>カ</sup>火<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>。と<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

ふ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>。い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

及<sup>カ</sup>凡<sup>カ</sup>土<sup>カ</sup>紀<sup>カ</sup>等<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>世<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>

へ<sup>カ</sup>。り<sup>カ</sup>葉<sup>カ</sup>集<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>降<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>芳<sup>カ</sup>来<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>

は<sup>カ</sup>え<sup>カ</sup>抄<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

あ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>。天<sup>カ</sup>降<sup>カ</sup>射<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>

り<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>来<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>。或<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>伊<sup>カ</sup>与<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>凡<sup>カ</sup>土<sup>カ</sup>紀<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>

天<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>落<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>。一<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>久<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>

一<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>伊<sup>カ</sup>与<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

詞<sup>カ</sup>林<sup>カ</sup>系<sup>カ</sup>葉<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>凡<sup>カ</sup>世<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>我<sup>カ</sup>朝<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

家<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>少<sup>カ</sup>彦<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

古<sup>カ</sup>語<sup>カ</sup>拾<sup>カ</sup>遺<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>取<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>具<sup>カ</sup>山<sup>カ</sup>銅<sup>カ</sup>鑄<sup>カ</sup>日<sup>カ</sup>像<sup>カ</sup>鏡<sup>カ</sup>

但<sup>カ</sup>神<sup>カ</sup>代<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>具<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

●<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>香<sup>カ</sup>具<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

あ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

あ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>

書成

後志

紅毛の如く、昔々あるものなるや、  
砥石入楚云、向つてあるものなるや、

あつたや、あつたや、あつたや

古  
●古 漢の漢國のふりあるものなるや、  
●古 漢の漢國のふりあるものなるや、

揚貴妃

揚貴妃ハ蜀州司戸楊玄琰ガ女、蜀國より誕  
生ト、小字を玉環ト云。幼時父母小誰モ孤ト  
なまつり。漢ト云ふる比、仲小墜、  
後人其地を呼ぶ名、洛妃池、叔父河南府士曹  
楊玄瑤ガ家、小妻のこらるが後、  
弟十八の隋子壽王の妃トあり。或人楊氏の女  
廉、  
潜ふる力を、  
の宮と云ふ、  
女と娶、  
楊氏其名と号、  
天真、  
天真宮、  
他

流し寵愛を甚し。然小天宝十四載安祿山が  
 乱小依く帝貴妃と共小蜀小越流し。中路馬  
 嵬の驛小入せ給。時小六軍の將士飢疲を怒く  
 動じ。陳玄礼ケンレイを執。禍本楊国忠ヨクニチが為知らり。と。  
 將士と招く回忠を殊と。然ら上へ貴妃も佞  
 ち小預へく。流して帝小乞く高力士。貴妃と  
 引起く佛堂乃方小連行羅の巾キヌ少て。縊殺し  
 尸を茵小裏西郭の外一里斗道の側小埋と  
 りり。年二十八歳。乱去りて帝蜀より  
 遷セリ遷りて長安よへせ流し。昭帝貴妃乃  
 るを流し。けり。其は蜀玉の及士  
 楊道幽し。玄者矢り。人の魂魄を尋ねし。流  
 と得し。上皇彼とみく。貴妃の魂を尋ねせ  
 給ふ。道士柔く其術を竭上へ碧落九玉を  
 窮下へ。黄泉地の底小没く。金輪陰小あり。と  
 偏求ヘンモウ心ココロをシ茫々マウマウとシ。及くと。安らぐ。激  
 海の東天涯を極つ。く蓮壺レンウ仏あり。と。  
 多し。と。小玉く。と。最え。と。仏あり。  
 是蓮葉交り。上小樓閣多し。西の廂乃  
 下小洞の扉あり。金玉とみく飾り。東よ  
 向く大門あり。額有く。作さ。玉玉の玉妃  
 ち真院とせり。方士悦入く玉の局と

楊貴妃

二

喚く童女あまの門を突く。又俄かしく碧衣  
あまの侍女あまの同方士因く唐の天子乃  
後也と。侍女の云玉妃ハ方小寢さるる時  
侍色よ。方士令殿の階乃と小座を。時不  
日喚さる。既小疾明なるとさる時。侍女等て  
内不入且目不玉妃唐の天子乃使なりと同  
九華帳の裏小夢寐寝るる衣を攪さる。梳を  
推起堂より下るる時。ひ霓裳羽衣の舞小  
似さる。玉の容寂寞さる。て出給ふ。た衣小侍  
女七八人。借方士小向く上皇の妾否と同決不  
天皇十に載さる。已還のゆと同給ひ言流て  
涙を流し。我ハ木上界の諸仏さる。一が先の  
世不上り。く思愛ゆが不下界小謫居て  
夫妻為るゆを得さる。既小死して後音容兩  
なり。渺茫さる。今世世小あく我を求く  
思也亦生せり。玉妃令の釵をぬく其本を  
抑さると上皇不飲と。舊さ好くと。徒然  
と。P一と。さる。方士信を受くと。をせし  
共世令の釵ハ人の常小用らむ。當時乃  
一ゆ小他人乃同さる。ゆと兼さゆくと。小  
駭と。も。ん。と。玉妃同く退と。さる。  
あまの御有が如し。徐有て言く。同昔天皇十載

御記

御記

鞞と同して暑丸と驛山の長す殿小遊見

秋七月七日孝牛歳女相見甲子の夜殆半侍

衛の武士東西乃病小体ゆり獨上皇と私法

預ハ世しく夫婦とさうん去小在ハ比翼のちと

うら比小あし連理乃枝とさうんとお誓

ひてもを執く互小泣咽一と上皇楊のこ

おゆふ一ハ一念小ゆく又比孝世芽小

最るを得む後比下家小随と目後縁を

法ハ互小相るく好念舊の如うん是小

ゆく上皇も亦人間世不久し小惟ハ自

母ト自苦むるゆりして錦帳の内小入ゆふ

方士も涙を押しく其りり唐士小還く上皇小

奏して法の釵と故と上皇美く是ハ世不有

あなうと固く彼美妃の私法を治上皇涙を

涙ハ湯衣の袂とあらゆセゆひ感歎更小

止む月小玉親妻さゆゆく行りてあゆみ

ゆふ志取意

我まごまごぬ藤月のぬをいつくともりん

ふ明小守えさう藤月の安室小流と源氏

夕顔さふ源氏と夕顔と同車あては系

院ハゆゆ小時源のさふ

「おもはる人のこゝろをよみておたのめたる

易記

是の唐士玄宗皇帝小姓くP方士ふくく

唐玄宗明皇帝諱隆基睿宗皇帝第三御子也母竇

氏号昭成皇后太極元年壬子八月受讓在位四十

三年于時宝應元年四月五日於西内神龍殿崩御

讓後肅宗初當七年御齒七十八歳已上新唐書

方士ハ云蜀国道士楊道幽也長恨歌曰臨邛道士

鴻都容能以精神致魂魄註曰道士姓楊名通幽矣

網鑑大全注曰方士方外之士矣杜預曰方法也法

術之士也矣方士といふは此の如きとあり

と云く

後と云ふは政正しくありしを中絶と云ふ

絶と云ふは

開えの初よの玄宗天下の政と云く志はひ

矯と云くめ珠玉と捨綿繡と焚ヤキ林松の如き

りあり。弱天下の候約と専し改政あり

やうなりしうた。今其末小及くい傳めり者い

救と云く直と云者い怒小をく。女色小惑ひか

らりとせ極め長生の術を求め玉潔の縁を

収び終りし新唐書取意 色と重トとい長恨

歌曰漢皇重色思傾國在 色をめぐくつてけり

容色並双の美人と云は

網鑑玄宗記云壽王妃楊氏之美絶世並双上見而

悦之矣

揚家の娘つらふ倭く其名を揚家妃と号すと  
揚玄瑛シシが女メを揚家妃と号すと。揚ハ姓。夫妃ハ  
宮の名。妃ハ后と。妻メよふ紀と

経共を子細りて馬鬼ウマノキが原ハありくありてい

大明一統志三十二曰西安府馬鬼坡在興平縣西

二十五里唐揚貴妃葬处ト矣 唐本馬書云馬鬼漢

武時文成方士王利三人仙士乘神馬為種々不思

儀其馬廣野古墳出不意因其所曰馬鬼全文畧

上碧落下黄泉とあるト也ト又小魂鬼のゆりうと

長恨歌云上窮碧落下黄泉两处茫茫

皆不見ト矣 韻會曰碧落天也ト矣 增韻曰碧深青

也ト矣 黄泉ハ左傳曰天玄地黄泉在地中故言黄

泉ト矣 魂魄の二字ハ又盛小紀と

又小来蓬萊とあるト也トい行小

十洲記曰蓬萊山對東海之東高一千里周遍五千

里外有圓海繞山海正黑而謂之冥海其風而洪

波百丈不可得往來上有九天真王宮蓋太山真人

所居ト矣 山海經曰蓬萊山在海中上有仙人宮室

皆以金玉為之鳥獸尽白望之如雲在渤海中ト矣

神社考云支那諸書指言蓬萊者於日本有三所一

曰紀列熊野一曰駿列富士一曰尾列熱田ト中畧

易書記



曉風集云尾張之熱田大明神則楊貴妃也楊什伍  
云東海上蓬萊是指熱田蓋熱田廟前有山松茂森  
々然是号蓬萊俗相傳云熱田大明神化楊貴妃也  
彼大唐故玄宗困天室之蒙塵熱田之廟背有一基  
之石塔其長二尺計其形太醜巫祝等指之曰貴妃  
之塔婆也又廟外有玄太輔之祠會云玄宗三郎之  
祠也矣 私云方士貴妃の魂魄とありし如の  
蓬萊山の尾州熱田と指く云々。又蓬萊山  
の時の條福不死の草とあり如の蓬萊山の  
然形如士熱田此之新と指く云々

ありし如の蓬萊山も

源氏桐壺出ふ更衣の果流ふを流るるの  
河原う小陽門のひそか下句ハ玉のりうを  
そこととるくくとも。河海抄云やがりし  
方士がまじく。幻術士の名と。玉のまじく魂乃  
在りて。此は入楚云方士がやうなる幻術の  
士もあつて。つらふりうとなおもあつて  
めとつてさりのととつて。今葉は流小ま  
かりしもつてふてりしとせ方士りて。方士  
が乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
則方士が名をまじく我命と云るなり

りつと

▲常世の國 蓬萊のく。常盤のゆく。常世國則神仙秘區  
代々ふふり

非俗所臻

▲宮殿盤々として更小色際もろく

宮ハ周易曰上古穴居而野処後代聖人易之以宮  
室上棟下宇以待風雨 殿ハ史記秦始皇本記  
曰始作前殿上可以坐万人下可以建五丈旗  
是宮殿の始めく。盤々ハ杜牧阿房宮賦曰盤  
々馬 註曰盤々盤桓之貌

▲魏々山姥小に七室ハ源氏供承り小記と

▲漢宮万里の移ひ長生驪山の有極と

漢宮ハ漢の宮殿乃緒接するところ。長生ハ長  
生殿をとり。則驪山なり。驪山ハ関内道の京  
兆府臨潼縣乃東南なり。其麓小在温泉昔  
秦始皇石とくみく温泉の処せり。漢乃  
世ふくく武帝重て加修理先帝太宗貞観  
十八年此処小離宮と宮建く名温泉宮今玄  
宗皇帝天寶六年十月再温泉宮と遠まして改  
華清宮凡此処小十八の宮殿と建修ふ。安祿  
山以珠玉真龍鳧石の蓮華等と修く。玄宗  
悦くそと温泉の中入。時小蓮華ハ

楊貴妃

笑とて、負名ハ動くかよく、楊貴妃をよとて  
りていほるを捨く石蓮のよとせり  
明皇雜錄及一  
統志取意

△ち真殿と類のよとてよらえりつえ世所よ

徘徊——長恨歌傳小いを真院とて、今熱同小

春叩門とて額有く門を、彼方士召来てたて

くら門くとて傳ふ、徘徊ハ鉢木小泣と

昔ハ驟山のまを乃同小とも小泣め——花の色

明年のまを貴妃と輦と同一て驟山の花は法

信孝うら。帝此時新小一湯と廣く比と作ら

其醉最良系うら  
玄宗本記

後ハ月夜もゆりて思うる後うか

のあひふおきくおあひのあ神やうら月うめりて思うる  
勢伊

△唐の天子乃勅の侯方士をよとてありと

長恨歌曰関道漢家天子使 此の香くとふ記を

△九花の帳と押のけて 長恨歌曰九華帳裏夢魂

驚攬衣推枕起徘徊 九花帳の衣を攬ふゆい

くら雲布のやうらあし、九ツきひひる帳こ

△玉の簾とくけつ 同云珠箔銀屏遮迥関

△まの鬢を乃顔 同云雲鬢半偏新睡覺花冠

不整 又云雲鬢花顔金步搖 曹子建洛神

賦曰雲鬢我々 吕延淑註曰雲鬢美髮如雲也

寂寞くら湯眼の内小涙と流へさせぬか

楊貴妃

長恨歌曰玉容寂寞淚闌干矣

韻會曰寂寞無聲也矣

梨花一枝春帶雨含情

淚のらかりぬぬの梨花ふ露りりぐと

長恨歌曰梨花一枝春帶雨含情矣

詩人玉屑云介甫云梨花一枝春帶雨桃花乱落如

紅雨下畧

大液の芙蓉フクヨクのらまらぬ未央ヒヨウ乃柳の緑ミドリとそふい

いと増らへと 大液の池の名と芙蓉の蓮

花とあふむ小河ふ流ると未央の未央まゝと

大液の名と大液池小芙蓉あり未央まゝふ

柳のりは芙蓉の柳も未央妃のらくく

よい及びと 長恨歌曰大液芙蓉未央柳芙

蓉如面柳如眉 一統志三十二曰西安府未央

宮在府城西北一十四里漢高帝建内右東闕北闕

前殿下畧 源氏桐壺卷云修ふうけり揚貴妃の

うらひのうらひと修作とくも

とわらわれいと少ゆひる 大液の芙

蓉未央の柳もげふかひひらううらう

うらひのうらひとひらうらううらう

うらひ下畧 是の歩門更衣の別をとおと

揚貴妃のたのうらひとあはれ

好ふ相く

△皇太后のまの粉黛の敷色のりも好むや

長恨歌曰回頭一笑百媚生六宮粉黛無顏色一矣

六宮といふ周礼曰天子后立六宮鄭氏注云前一宮

後五宮也五者后一宮三夫人一矣

後漢后妃紀序注云皇后正寢一燕寢五是為六宮

也矣粉黛ハ白くしろいまゆとこころ卒於婦女

小阿小波と

△朝政ハおこころ好むひぬ

韓詩外傳曰明君將

修礼以教朝一矣 藝文忠集曰所重在君德為親臣

六卿所事在朝政為重臣輔臣者所以成就君德也

○さうらの物まのりまゆりかむと小波の安治のり

△同小つゝよのまよりまゆりまゆりまゆり

うまゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

まゆりの名りまゆりまゆりまゆりまゆり

少くつゝけり

○まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

西院皇 右查

○まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

△三幕ハ安室小記と筐ハたぐりみ小波と

△まゆりまゆりまゆりまゆりまゆりまゆり

長恨歌曰銅合金釵寄將去一矣 釵ハ實録云燧人

氏始作髻世媼女荊按以竹為筭資髮至堯以銅作

陽貴也

之又舜時以象牙玳瑁



是釵之始也四声字苑云簪插冠釘也

蒼頡篇曰簪笄也叙名曰笄係也所以

拘冠使不墜也

說文曰簪其端刻雞形

信ト汝ト一と汝ト一と汝ト一と汝ト一と

信ト汝ト一と汝ト一と汝ト一と汝ト一と

信ト汝ト一と汝ト一と汝ト一と汝ト一と

長恨歌曰臨別殷勤重寄詞詞中有誓兩心知

長恨歌傳曰方士受辭于信將行色有不足王姬固

懲其意復前跪致詞請當時一事不為他人聞者駭

於太上皇

其初松の七日乃夜二早小誓一

あゝの願ひ比翼のなとくうん地小ゆ〜バ秋ら

連理の枝とくうんと誓一〜とひとくふ信之

よや私語うまこ九今もささむら涙うま

長恨歌曰七月七日長生殿夜半無人私語時在天

願作比翼鳥在地願為連理枝

七月牽牛織女相見之夕中畧仰天感牛女事密相

誓心願世々為夫婦言畢執手各嗚咽

比翼鳥ハ山海經曰崇吾山有鳥如鳧一翼一目相

得乃飛名曰鸚

飛其名謂之鸚註曰似鳧青赤色一目一翼相得

揚貴妃

乃飛兵 博物志曰比翼鳥一青一赤在參岨山  
連理枝ハ文德實錄云美作常陸二国獻白鹿連理  
之瑞兵 日本後紀云弘仁三年三月右京人弓削

宿称弓鷹獻連理木

搜神記曰宋大夫韓馮取妻而美康王奪之馮怒王  
囚之俄而馮自殺妻歎之自投臺下死遺書於帶曰  
願以尸骨與馮而合葬乎王怒弗聽使人埋之冢相  
望也王曰爾夫婦相愛不已能使冢徙則吾弗禁  
夕有大梓木生於二冢之端旬日其大合抱屈體以  
相就根交於下又有鴛鴦雌雄各一恒栖樹上晨夕  
交頸悲鳴宋人哀之号其木曰相思樹

二星之事朝顔小記

玉葉集小夫誓の所製小

「いそぐての世死くの後のは乃世もいそぐとくせらるるもいそぐ  
同集小女師友系芳子抄也」

「秋あらしとこのあらしもうらやまもあらしとあらしもあらし

▲流精生死 柏崎小治と

▲三重の夢 網林之記抄云三重の夢の事いそぐやせて

男のゆきとこいそぐあふくこ乃夢をいそぐあふくこいそぐ

○いそぐいそぐいそぐいそぐいそぐいそぐいそぐいそぐいそぐ

▲美や驟山の文の内丹乃須遊の羽衣の曲

羽衣の曲とい寛裳羽衣の曲之開元六年秋八月

湯貴妃

望月玄宗南樓小出陣有と月と新小陸州  
申文師とりつら妙術の術と。鴻都客とりつら  
道古く。二人侍度と。ゆるふ天との月急敵の  
快楽と主と不見せしむ。忽大虚よりまをの  
猿涉敵小迫くさうさうと二人則主よと供を  
一に到著月中仰るるふ一の大門あり。甚固ふ  
樓閣名王光の申小湧出。花涼の宮敵  
被地小動揺しとくは木定るる。直ふ人  
下せむ百里小隔く一面小指指の回と連ら  
公人乃士とふ小系。鶴小驚しとく遊。其廿十  
隊人能衣白裳とくさうり。白裳小系ては木  
流の樂を新。移の音樂を奏と。角て  
申天師還者有とくさうり。白裳小系ては木  
飛して夏の覺が如くも橋の上小忙給して  
水所と。帝月中小へは公女の舞曲と志を歌  
あひたり小や。律と定めぬを成して電裳  
羽衣の曲を製しとくさうり。玄宗本紀取意  
▲驚破電裳羽衣の曲 長恨歌曰漁陽鼙鼓動地來  
驚破電裳羽衣曲 兵 天宝十四載祿山牽藩兵十  
餘万起漢陽鼙鼓を鳴し地を動しとく羽衣の  
曲ともお破しとくさうり。破といふと。とくさ  
と云約の。世ふすりやとくさうり。とくさ

楊貴妃

百



長恨歌傳曰貴妃進見之日奏霓裳羽衣以導之矣  
霓裳羽衣曲一越調也體源按云玉樹後庭花号霓  
裳羽衣曲但舞与樂別也云云 陳後主取作也有  
亡国音有云三女序此内云有亡国音矣  
西清詩話曰葉法善引明皇入月宮聞樂声故但記  
其半會西京府楊敬遠進婆羅門曲声調略合按之  
便韻乃合二者製霓裳羽衣之曲矣 說郛一百卷  
唐明皇三十四曲曰河西節度使楊欽述獻一說羅  
公遠与明皇遊月宮見仙女數百皆素練霓裳問其  
故云故作是曲矣

△云々の系流小流と。胡蝶の舞ハ源氏供養の

△云々ををのものとあいのりをと流すの流と

△云々と未承承く乃流猶更小と死の流と

大圓覺修多羅了義經曰一切諸衆生在始幼在明  
皆從諸如来圓覺心建立矣 弘決五曰此真性遍  
於法界迷謂内外惟一心矣

△云々の二十五有の内何と生者必滅の理小と  
二十五有といふ之の問也。本論曰三界總  
舉則六道別分乃二十五有矣 荆溪頌曰四洲四  
四惡趣四六欲天六梵天一無想天一五那含天  
四禪天四空處四矣 今云二十五所と何といハ  
生あり死ありて因果亡せざるを云

生者必滅ハ涅槃經曰一切諸世間生者皆皈死壽命雖在量必有終尽夫盛必有衰合會有離別矣大法句經偈曰常者皆尽高者亦墮合會有離生者有死矣後江相公頽文曰生者必滅秋尊未免轉檀之烟樂尽哀來天人猶逢五衰之日矣

▲天との五衰須弥ハ羽衣小記と

▲須弥の北列乃抄々小洲の千多終小抄々

四列ハ東弗婆提南閻浮提西瞿耶尼北蔚單越

とと北列ととと東弗婆提ハ西域記曰東毗提

訶列曰曰弗婆提謂曰初出也俱舍曰東毘提訶

列其相如半月身長八肘壽二百五十矣

南閻浮提ハ白鬚小記と

西瞿耶尼ハ此云牛貨藏疏云以彼多牛以牛為貨

俱舍鈔云劫初時因高樹下有一室牛為貨易故俱

舍曰西牛貨洲壽五百歲相圓并缺長十六肘矣

北蔚單越ハ西域記曰云北拘盧洲旧曰蔚丹越於

四洲中有情処皆最勝故亦云高上出餘三方故

形如方座四面量等長三十二肘壽滿一千歲矣

長阿含經曰北蔚單越地平如掌并有蚊虻蛇惡

獸四時和順不寒不熱并有冬夏華菓後盛其土常

有自然粳米并有糖糟形貌常壯如閻浮提二十

計人相貌平等不可分別手取種々樂器調絃鼓之

南閻浮提

十五

揚貴妃

音以妙声和矣

▲老女不定之境

北朝の壽命千余年を越へる事小

老かろし。此も圖浮提い老が不定の

から色えんふり眼常より。是故小女

受悦し修りたりり小川の果結小

觀心畧要集云世人之愚也於老少不定之境成

秋万歳之執矣

秋万歳之執矣

▲秋万歳之執乃るけささささ

秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

▲秋万歳之執乃るけささささ

漲りゆく。早人せとまゝに公家ふゆるくしと  
えりゆ。貴妃ゆゆと深つししゆくしと  
其書をも玉匣小細く三日の後穿くふり小跡  
うく矢さう 揚妃外傳取意

愚見抄云當時といふと云ふ。土依日死小  
往日と云。伊物真名本小當初昔時寂初と云。往  
昔ハ増韻云前代也 云

▲揚家の深定小妻のいと 長恨歌曰揚家有女初

長成養在深園 云

▲偕老同穴 發白くむらむらむと流る小流く死

ぬい同穴小くむらむらむと流る小

詩氓篇曰及爾偕老老使我怨 云

同太車篇曰穀則異室死則同穴 云 左傳王風大

車篇曰偕老同穴註云穀則異室死則同穴穴壙也 云

▲たよさう小妻とさう たよさう久邂逅と云

増韻曰不期而會曰邂逅 云 詩經曰邂逅相遇 云

○この由良の湊小捨てふをさうさうふたふたは長

▲其、文月の七月乃死 古今草雅抄云めん月と

七月と。かこひら糸丹と云。孝よひふ月と

ちこし 下学集此月七夕諸人以詩歌之文献

於二星或晒昏篇以供星故云文月也 云

▲藤の一夜のびりたふ糸糸ハあふりしひるふ

揚貴姫

伊物秘抄  
○鳥のうゝごと世の二枚の葉を人あはれと云ふもいふと云く

▲世平小さぬ別ましのうらうら世も人よ

○世平小さぬ別ましのうらうら世も人よ

▲會者定離 前小記に又源氏供書にふもあはら

▲袖うらあまらふもあはらや ちよやいのちるやこ

○わらひ小まきふくもやぬかの袖あはらふもあはら

▲蓬ヨモギうら津ツツリ鳥 蓬うら津鳥と蓬津鳥の鳥を

うら津鳥の鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

万葉集小鳥津鳥の鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥をうら津鳥と云ふは鳥を

人とならぬを〜をヨスル

年部

源氏夕顔巻第六條つりのひまのひめりさうら  
よまよめてほひなすやりにだむの光のものをか  
尼よみにたる。とあつらんそめあつりあつたに  
一り。お車りるえにりりり。つれいん。てコレ惟えのき  
てゆきかほひらり。むむむ。をある大踏のなをよ  
〜むむむ。とむむむ。のむむむ。むむむ。のむむむ。〜  
あ〜むむむ。年部ハムのむむむ。むむむ。〜むむむ。のむむむ。む  
むむむ。〜むむむ。のむむむ。〜むむむ。のむむむ。のむむむ。  
むむむ。のむむむ。のむむむ。のむむむ。のむむむ。のむむむ。  
むむむ。のむむむ。のむむむ。のむむむ。のむむむ。のむむむ。

源氏夕顔

つあしんやうらりくおやろり 下畧

花鳥餘情をす菘の下のつらうしんをねまごして上小  
志とつりて介ホカあうやうにまゐるを云。車小を奉都  
とてあの上の菘キニとあうれいすのあしんを名つけり  
あましん  
是の夕歌の君乃君を云。家の行ハ  
ニ階ニカイつらりのやうにかしんをまゐるなり。  
けほの夕歌をよめて作りの之。妻く夕歌の徳よ  
波をもん合あるし

▲是の北山信家野雲林院よ後居は信よてい

紫野ハ志家那之雲林院ハ雲林院ハ波を 勅撰名  
所和号抄云。紫野ハ和名の水とて少ハ七時とて  
る。紫野ハ一ツハ大和をいハ同名あり

中右記云寛治六年四月廿二日上皇為御見物有御

幸紫野一兵

○我君のねよ久しとて後の花紫野ハ後も志のん 忠見  
安家い山院と云ハ舟屋と持と云之 今雲林院ハ  
雲林院をあらと云。高寺小紫武都の墓あり。又淳和  
帝ハ六十と云と云文と武都ハ院を安治ハ字法  
室院ハ院よるなりと云。是等の縁をよめてつ  
成

▲叔も我一夏乃回花とま早安ヤ居ゴもる方ハ成りハ  
安居ハ百萬小波と

敬白立花供養の事

法華經曰以テ一華供養於盡

像漸見無數佛<sup>ノ</sup>矣止觀曰燒一捻香奉獻一華如是  
小行必得<sup>レ</sup>作佛<sup>ニ</sup>矣

立花功德の支賢愚經云、經緯異相等よ及く之り  
供養の字ハ源氏供養小治也

▲右非情草木より之ヲ此花廣林<sup>多ク</sup>ノ用をこり置ん  
なりといふ人ヤ

け花ハ夕魚の花と云く。藻乃ハ夕魚の花ハ凡<sup>ヨソ</sup>難  
くハ深<sup>ク</sup>きと。いふハ此情のりありと云々。廣<sup>ク</sup>  
林小<sup>ノ</sup>暖<sup>ク</sup>なるハなりといふ人と云。置の字味ハ置<sup>ル</sup>  
は

▲鏡中泪を以一蓮一葉妙典の題目より

是ハ法華經と漢一ノ詞ハ云々及持明小治也

▲草木国土悉皆成佛道 鶴よ

▲鳥小<sup>レ</sup>んバたぶたをこるまゝと云々世の此<sup>ニ</sup>花を  
後撰集に遍照方ハ云々文字おつまじく云々其師<sup>ハ</sup>  
は

▲草花<sup>ノ</sup>ハ云々云々云々云々云々

▲白<sup>ク</sup>花のそのれひよりえまの<sup>ハ</sup>とひ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>  
夕<sup>ノ</sup>花の約ハ夕魚乃<sup>ハ</sup>藻<sup>ハ</sup>也

▲ち<sup>ハ</sup>それ<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>そ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>に<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>り



是ハ夕歌、巻の源氏の君は方うそつつけり。あ  
奥よ記とたそつ是時ハ雲林院よはと

▲名ハ人知さそそや一さうさるよりさるこれハ

夕歌巻云ハ<sup>ダイジ</sup>海身ついでか<sup>カ</sup>の志あつてさげのさかな  
夕歌とP作ら。花の名ハ人めさそつうあささうは種  
あんらさゆけりともP。上畧 人めさそそとい名くらりハ  
人こ一さそそ。鳥こさふそそ云云ハ一。女の名ハ  
夕歌。さそそ。さうさるとさそそ一くつさそそ一

▲何ぐ一の後よも常いさあうふはよみ系らつらとゆさめ  
ゆ一の流ハ河原流とさそそ。夕歌の上世系よそ果あふ  
くぐりめさ系よはゆひ。八月十五夜源氏の君ハ回車  
こそ。六系河原流ハうつとをゆひ明ハ土日月の夜さるり  
ゆふ夕歌の上の果絶常ハ河原流よさあうゆとそ  
そと。妻く夕歌ハゆと

▲空めさそそふ身となり 同巻に夕歌の上の方よ

「えありとらん夕歌のうらあハはそくれ時のでらめくら

▲瓢箪<sup>ヒョウタン</sup>屋<sup>ヤ</sup>草<sup>クサ</sup>滋<sup>シ</sup>顔<sup>カノ</sup>洲<sup>シロ</sup>之<sup>ノ</sup>菘<sup>シュ</sup>藜<sup>レイ</sup>藿<sup>クワ</sup>深<sup>シ</sup>鎖<sup>サ</sup>雨<sup>アメ</sup>濕<sup>シ</sup>原<sup>ハラ</sup>憲<sup>ケン</sup>之<sup>ノ</sup>櫃<sup>ヒ</sup>

是ハ橋直轄ガ民部ヲ太補申スル文の句也。瓢箪とい  
瓢ハなまひいさこ也。藜ハゆと作の果也。皆食物とる  
也。屢<sup>ル</sup>空<sup>ク</sup>とハ飲食とりのりくて彼、瓢箪も空一  
り一りみ交と者一と也。藜藿ハあさごとさるこ  
歌削ハ孔子の弟子也。原憲ハ魯の玉の人也。心賢く

大務進より。極てまじりて。是をさうれとせ。況  
上、白のふい食相なる。其の瓢箪は。一。同人よりけ  
れ。いま。深くして。跡。絶。なり。と。り。下。白。の。底。の。ま。源。く  
ぬ。極。と。深。く。く。ふ。細。き。こ。り。也。直。轄。家。の。食。と。ま  
と。款。洞。原。憲。よ。寄。り。と。ま。り。こ。び。申。文。の。直。轄。い。と  
く。ま。は。上。よ。流。去。と。な。り。風。よ。さ。せ。り。天。曆。帝  
と。と。結。成。と。な。せ。給。ひ。と。内。裏。懐。七。の。附。お。せ。給。ひ  
た。り。乃。て。直。轄。申。文。か。り。と。り。と。り。と。り。車。より。極  
か。さ。れ。り。と。り。と。り

後拾  
人よりぬまの極よ流ぬのきけむひなはるのじ基經  
夕陽のりんをいあうふ窓とらうのくさる 證文進る可る

愁歎の泉乃る。名。愁歎の泉。乃。名。善導定  
善義云到處在餘樂唯聞愁歎戸。兵。泉。の。愁。歎。の  
ついでめとる

廬山乃名のゆかの大明一統志五十二日南康府廬  
山。在。府。西。北。二。十。里。古。名。南。障。世。傳。周。武。王。時。降。俗  
兄弟七人結廬隱居於此改名其山巒嶂九層崇巖  
萬仞周五百餘里實南方巨鎮也。兵。

そらうどういびふろうがけいごひあつらりあうやれ  
秋乃山

能文疎考。そらうどういびあつらりあうやれ。脆月と  
せう。さん。志。川。の。終。る。あう。やう。の。愁。傷。の。あつらりあうやれ

▲善戸の竹のし

山崎の竹のし 山崎の竹のし 山崎の竹のし

▲山の鶴のふもあつて月さりの室より新地の人

夕鳥のふもあつて月さりの室より新地の人

▲山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

山崎の地があらたけいさきさきけいさきさき

▲まろしーとまろしーかーりけー 南流よりゆきさき

中、院前太府いかに揚てく作しきしき、夕教をき

よきしきとまろしーかーりけー

▲甚は源氏の中ねと支へしは夕鳥のふもあつて

夜にけしきしきしきしきしきしきしきしきしきしき

ゆきさき守作弥勒佛しきしきしきしきしき

夕教、まろしーかーりけー

あしきまろしーかーりけー

居のまろしーかーりけー

あしきまろしーかーりけー

まろしーかーりけー

安んず此世のこゝろいりたりと云ふことなほひて  
是の派氏の暮夕の宿よと云ふり給ひて。藤  
内藤はうどとら人のほろめのとて安んず  
るのと云く 御嶽といふ報及令華山と云く。号吉野  
山国軸山或曰耳香山青垣山本朝七高山之内其  
土皆黄金也因称金御嶽頂上金剛藏王堂南向本  
尊二丈六尺文武天皇大宝元年役行者建立矣

。然もよひ記のいと今然んべい令の内嶽よと云ふ  
は嶽をいふ和名すふ今ももとらゆく。枕のよ  
ありんるりのよれりのふけはうどとらと云く  
金峯山の令則為王の弥勒出世の時地よと云ふ  
ち後一ゆふ林と。仍ち内嶽をいふ弥勒を礼と云く  
弥勒の生補処のむと云く。尺のの外属と云く  
十減初の始よと云く。今法をゆふと云  
未孕ゆといふと 已上岷江入楚

弥勒西域記曰梅哩麗耶此云慈氏旧曰弥勒矣  
淨名疏曰過去為王名曇摩流支慈音国人自尔至  
今常名慈氏矣 慈恩疏曰當來人壽八万歳時出世  
三會說法度人無量是釈迦遺法弟子也矣 弥勒  
下生經曰弥勒菩薩即於出家之日便得成佛坐菴  
華樹下花林園中三會說法故云菴華三會矣  
精進ハ梵音云毘梨耶法界次第云秦言精進欲樂

勤行善法不自放逸謂之精進精進有二種一者身  
精進二者心精進若身勤修善法行道禮誦講說勤  
助開化是為身精進若心勤行善道心々相續是為  
心精進

▲そぐら 景清よ返す

▲源氏物語と尺初終ひ一々つゝ惟光と振さるせあ  
花おれと空のいふと扇のほまひとつゝ一々に  
花を折てあつとつ

夕空、空を云は惜の花の終りや一あを折てまらむと  
の終へいけいあまゝる門よくつとつとすのいざれ  
つらや戸はよ、黄なるもつゝのひくもつゝまなう  
若き一つらつゝのわうけけなり、つでまておまひ  
ゆる扇のつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
校もまけけなをさめらむとつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
けく惟光の朝長の出さるゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
惟光は惟光と振さるせあのをあまて空のいかに  
振らひ本文とおまをり。 白と扇のつまこつゝ  
つゝつゝ。河海抄よ白と扇のあふ志とつゝつゝ。  
俊成の女乃後よつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
已上岷に楚 惟光の本歌のめはつゝつゝ  
▲お後をを方人よとつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
おアとひとりつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

▲定めぬ延雲トビのころ君のあつとと誰とあつ流の

夕靄トビあつ延雲のみふれはくはをうよあをけぬをぬ  
いつあつとれらうき 新古今集よ

「白波のよする浦ふ世を流く次延雲のよふれは君もあめ  
あつらひいせあつとめくはけり。此流よけ君のあつ  
しとい夕雲のよとえく。源氏の君惟光をうして望  
あひて流。夕雲のよといありあつと

▲折くころとよきともあつたせうれかのかくもむむの夕雲  
同書よ源氏のあつ。夕雲のあつふあてよあつとと  
あつとよあつあつあつ。本あつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつ。弄花えあつあつあつあつ

夕雲とあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

▲夕雲のあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

夕顔

本草綱目云壺盧以正二月下種生苗引蔓延其葉似冬瓜葉團五六月開白花結實白色大小長短各有三種色矣

夕顔ハ源氏の妻乃多くらあとののちとひくまら乃  
名とせり。叔夕顔の上ハと位中おの女。夕顔早ふ  
あさるさ時。父の申おうらさゆく。其後ハの中お  
少おとつひ。時。夕顔とんあゆひと。とせの程  
うよひゆひふ。玉着の着せれゆふ。ハの中お乃  
ハの方とあゆめと。せんこくあゆめくあゆの系  
あゆめとのりこふうられ居ゆ。ハ。この位居りふ

夕顔

せりり一也。山里小うれ給ふと方た之のよあ  
よふ糸あつり小給り給ふ。源氏十六の年。六糸  
まらりの水志のびりりとのついで。源氏のめのと大  
哉とつひ一尼糸のあふ給ひしと。とあつひ給ひ  
おけ。あのおらとをさふ。夕虫の着らつら。給ひ  
し。夕虫の着らつら。夕虫の着らつら。給ひ  
と。とあつひ給ひしと。とあつひ給ひ  
と。とあつひ給ひしと。とあつひ給ひ

ひ。八月十六夜夕虫と同車少く。六條河原  
院へつらり給ひ。十六日の夜。およあつひ。十九夜  
お死し給ふ。此時源氏ハ十六糸あつ。毒く夕虫の  
あつひ給ひしと。

豊後國よりあつら傷あつひ

先代旧事国造本紀云豊国造志賀高穴穗朝御代  
伊甚国造同祖宇那足居定賜国造。大和本紀  
云豊前豊後ハ崇神天皇彼国小太内と建給ふ。依  
之民家富貴せり。小中を。然る此。小ハ使臣あつ  
換るま。いとと給と。あつひ給ひしと。とあつひ給ひ  
せ。一とと云。豊前。後小宮造。一とと号。豊後。

文類



国<sup>ト</sup>又<sup>グ</sup>大内<sup>ノ</sup>の多<sup>ク</sup>を<sup>ミ</sup>浦<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>也

傳<sup>ノ</sup>の字<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>ハ田村<sup>ノ</sup>也

▲さても松浦箱崎のらつひ勝<sup>ス</sup>きつうといふせはれも多<sup>ク</sup>なり  
といふ男<sup>ノ</sup>といふ女<sup>ノ</sup>といふ

源氏玉<sup>ノ</sup>首<sup>ノ</sup>を<sup>ミ</sup>やりの宮<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>といふことありき  
りりい<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>りり<sup>ノ</sup>りり<sup>ノ</sup>。松浦<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>崎<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>なり社<sup>ノ</sup>なりといふ  
松浦<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の宮<sup>ノ</sup>も箱崎<sup>ノ</sup>もやりの宮<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>同<sup>ニ</sup>体<sup>ト</sup>也。修<sup>ク</sup>れども  
名<sup>ノ</sup>もといふ男<sup>ノ</sup>といふ女<sup>ノ</sup>といふ。男<sup>ノ</sup>といふハ隈<sup>ノ</sup>也

松浦神社<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>肥前<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>松浦<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>松浦<sup>ノ</sup>下<sup>ノ</sup>松浦<sup>ノ</sup>鏡<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>三  
座<sup>ノ</sup>也。上<sup>ノ</sup>松浦<sup>ノ</sup>号<sup>ス</sup>田嶋<sup>ノ</sup>神<sup>ト</sup>。神名<sup>ノ</sup>帳<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>註<sup>ス</sup>云<sup>フ</sup>仲哀<sup>ノ</sup>天  
皇<sup>ノ</sup>弟<sup>ノ</sup>雅武<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>矣。下<sup>ノ</sup>松浦<sup>ノ</sup>号<sup>ス</sup>志々伎<sup>ノ</sup>神<sup>ト</sup>。

同<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>註<sup>ス</sup>云<sup>フ</sup>雅武<sup>ノ</sup>弟<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>城<sup>ノ</sup>別<sup>ノ</sup>王<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>矣。鏡<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>或<sup>シ</sup>云<sup>フ</sup>風

土<sup>ノ</sup>紀<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>昔<sup>ニ</sup>氣<sup>ノ</sup>長<sup>ノ</sup>足<sup>ノ</sup>姫<sup>ノ</sup>尊<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>松浦<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>遙<sup>ク</sup>覧<sup>シ</sup>国<sup>ノ</sup>形<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>勅<sup>シ</sup>祈<sup>フ</sup>  
曰<sup>ク</sup>天神<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>祇<sup>ノ</sup>為<sup>シ</sup>我<sup>ノ</sup>助<sup>メ</sup>福<sup>ヲ</sup>乃<sup>チ</sup>用<sup>テ</sup>御<sup>ノ</sup>鏡<sup>ヲ</sup>安<sup>ク</sup>置<sup>キ</sup>此<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>鏡<sup>ヲ</sup>化<sup>ス</sup>  
為<sup>シ</sup>石<sup>ト</sup>而<sup>シ</sup>在<sup>リ</sup>山<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ス</sup>鏡<sup>ノ</sup>宮<sup>ト</sup>矣。此<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の宮<sup>ノ</sup>を<sup>ミ</sup>及<sup>ス</sup>原<sup>ノ</sup>廣<sup>ク</sup>

継<sup>ク</sup>々<sup>ノ</sup>靈<sup>ノ</sup>社<sup>ト</sup>といふあやまり<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>廣<sup>ク</sup>継<sup>ク</sup>々<sup>ノ</sup>靈<sup>ノ</sup>ハ同<sup>ニ</sup>也<sup>ト</sup>松浦<sup>ノ</sup>  
郡<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>板<sup>ノ</sup>櫃<sup>ノ</sup>社<sup>ト</sup>といふ一<sup>ノ</sup>座<sup>ノ</sup>あり是<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>也。後<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>ハ別<sup>ト</sup>  
なり

新<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>。あひん<sup>ノ</sup>を<sup>ミ</sup>い<sup>フ</sup>松浦<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>秘<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>いふなり

筑前<sup>ノ</sup>国<sup>ノ</sup>筥崎<sup>ノ</sup>八幡<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>ハ在<sup>リ</sup>那珂<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>筥崎<sup>ノ</sup>村<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>属<sup>ス</sup>  
粕屋<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>二十<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>註<sup>ス</sup>式<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>筥崎<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>座<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>功<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>后<sup>ノ</sup>應<sup>ズ</sup>  
神<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>内<sup>ノ</sup>也<sup>ト</sup>人<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>醍醐<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>延<sup>シ</sup>喜<sup>シ</sup>廿<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>月

廿一日依託宣建宮柱於宮崎松原書新羅降伏之  
旨而置御座下立石柱祈神誓不朽矣 或云神功  
皇后應神御誕生の時胎衣と名よ入細の所一処  
ありあふ新崎と名つくとく 伊社の乾小魚里松  
林に方小つとあり其廣さうり南小二十町東あ七八町  
りろく一人に北あを十里程と名つと 大江匡房  
宮崎宮記曰箱崎宮在西海道筑前国那珂郡蓋八  
幡大菩薩之別宮也其処為體也北臨巨海西向絶  
域為防異国之来寇至跡於此地潮汐之声常滿宮  
中坤艮三十餘里乾巽七八里計取他木只青松  
而已矣 鴨長明文モレシキリ字練云箱崎宮いとく小つと

ふふふふふふふふふふ唐の海ふじりひく社地はあじ  
よあじりふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
私云此家の説小戒定惠乃兼うらふり  
兼清と名つくとく之れはつとく此時此法あふ小海  
と名ふも戒定惠の法なり  
漢古  
この家の根社ふふふふふふのねえふふふふふふふふふふ 行法  
ふふの林乃夕日秋うのりふふふふふふ秋乃乃兼兼乃地を分て  
ふふ乃林ハ雲林流小流也紫野ハ半部小流也  
兼兼乃淨社依あじの衆もく此とく  
兼兼の淨社此の杜ハ兼兼少流也  
依あじある社ありと 社のさうふふと横さ

ふきく。不浄觸縁フジクダケのものを。さうり眞入マコトたるうら  
 とのまき一ふせらる。世納ヨシノしくし。あがきもふりて  
 うくし。然シカ也カなり。本ホま一ヒト里リ斗トたるのふ  
 外ソトねと云を西を。是も其らて。今イマの左サ東トウの名とせり  
 夫マ乃ノの色イロ乃ノもの。西サイ東トウの法ホウも別ヒト也カ。信実

▲河カハりあり。左サ東トウの月ツキのあ。ぬとく。さる。ふま。さる。あ。あ。あ。  
 在イ東トウ昔キ多タの月ツキのあ。ぬの。さ。い。五イ東トウのあ。の。對タイの。あ。じ  
 乃ノ。さ。不フ。ま。く。あ。り。今イマ。夕ユフ。款クワンも。ふ。ま。乃ノ。ふ。あ。り。一ヒト。ま  
 う。さ。く。さ。り。さ。り。と。あ。あ。せ。あ。り。一ヒト。業ノブ年ネンの  
 杜ツ若カ小コ流リウを。月ツキのあ。ぬの。さ。い。ま。林リン院イン不フ記キを  
 五イ條ジョウハ昔キ大ダイ内ナイ裏リの時トキ。東トウ京キョウと。い。寅ユ風フウ坊ボウ。西サイ京キョウと。い。

宜イ義ギ場ジョウし。之ノ。尸シ 已上 抄 五イ條ジョウハ今イマのね。京キョウ通トウと云く。六ロク條ジョウ坊ボウ  
 門カドと今イマ五イ條ジョウし。さ。い。あ。や。ま。り。昔キ大ダイ橋ハシ松マツ多タあ。あ。は。じ  
 と。天テン正テイ十八ハチジュウハチ年ネンふ。六ロク條ジョウ坊ボウの。ま。り。海ウミせ。し。く。り。湯ユと。云  
 系ケイ坊ボウの。と。ふ。系ケイ通トウし。も。ふ。系ケイ乃ノ橋ハシ通トウた。り。

▲あ。さ。ら。あ。の。屋ヤづ。ま。り  
 屋ヤつ。ま。し。い。家カの。軒ケンの。の。ら。く。 廣ヒロ異イ記キ云ク夜ヤ中チュウ 鶴  
 鳴ナリ其コノ屋ヤ端タテ 矣 菜サイ花カ物モノ倍ハヒ云ク長ナガふ。ふ。あ。や。め。る。ふ。が  
 さい。め。し。よ。り。り。く。屋ヤづ。ま。り。の。ら。く。し。く。し。  
 又マタ後ノチせ。い。わ。ぬ。屋ヤ端タテも。な。り。り。り。り。の。め。ふ。ひ。る。や  
 山ヤマの。端タテの。ら。も。あ。り。て。月ツキの。ら。の。戸カドを。て。取トルと。云。ん

是コノの。六ロク條ジョウの。京キョウ。は。し。そ。夕ユフ款クワンの。あ。る。さ。き。夕ユフ款クワンを。ふ。あ。り

弄花云山の端八月とくくそふらとあつては月乃  
らふ山のく源氏よとくく源のくもあつて  
あふいらのく小うをりれりしと次キの夜うせぬ  
へと人らとくくあつてあつてとくくあつて  
垂ガ山のくハつらとくく小陽臺ヤウタイのりく小消やとく

宋王高唐賦曰且為朝雲暮為行雨朝々暮々陽臺  
之下キミス且朝視之如言故為立廟号曰朝雲矣

昔楚襄王陽臺とくく処小けき有くまよと神女来  
く會合をとくくおとくく小らとくく我の巫山の陽小  
りり朝よハけとくく夕よハけとくく人  
世とくくまよとくく若くおつて彼神女とくく

其廟とくく巫女廟とく

大明一統志七十曰神女廟在夔州府巫山縣治西  
北矣又云陽臺在巫山縣治西北南枕大江宋王  
賦云楚王遊於陽雲之臺望高唐之觀即此矣  
又云陽臺山在巫山縣治北高百丈上有雲陽臺遺

址矣

湘江の多ハ屢も楚畔の竹と深りしとく

博物志云舜南巡崩還葬蒼梧娥皇女英追之不及

至洞庭山淚下深竹即班死為湘水神矣

堯帝小二人の女りり姉を娥皇とくく妹を女英とく

共小舜帝の后とく舜帝將の時蒼梧とく知ふと

洞庭ある。二人の居別きをなすいよく。楚国の畔とと  
しし湘水の石も流らうれと死と。則ち舜とく二女  
の廟とともく。其、泣洞竹小か、ハコト。色班小流らう。

今の世も班竹とて現る竹への竹と。

沁嶷之詩云一枝班竹渡湘沅。万里行人感别魂。知

是娥皇廟前物。遠隨風雨送啼痕。

大明一統志六十五曰。湘江在永州府城北一十里。

源出廣西興安縣陽海山。流經郡界。至湘口。合瀟水。

合水至清矣。

▲竹竿乃志のぶる。志のぶるハ梅校少後也。

後後掛。石也。竹竿乃志のぶる。志のぶるハ梅校少後也。

▲紫式部が事乃跡小只ふる。一の流と斗と世一。

は紫式部ハ源氏供也。ふれと。何其の流ハ融云の舊

跡と云く。夕顔也。云々。ふれと。一の流と斗と世一。右

迹のりりり。そのととららら。さ。ふ。一の流と

つととととと。

ミシゴウニツツ。混江入楚云。何の流とととと

ちやうも流とととと。人乃実也。をい。て。とと

▲洞のぬいぬの世のさつりともたれ

古今。洞のぬいぬの世のさつりともたれ。洞のぬいぬの世のさつりともたれ。

箕胡は妹のともさつりら。何の流とととと。ふ。一の

ぬとととと。流ら川のぬとととと。あ。別ととと人の流

あるつとてく。世、亦乃のあて。洞のぬいねの世の  
さつりつとつけいりる

▲ま如乃月 心姑少治と

▲ふう一のふ。何某乃寺。何某寺ハ鞍馬をさく。

恙紫、あふふふふらん何うし寺とら。今う室ハ

是とあおせりい。何某、流不射一とさるの

▲融の大信ハ融不流と。えん某ハ葵、よふ治と

よこ夕虫のあ乃世ふよるいといひとらん治ひ一。あも

あつら一とて鬼の形。あもよらうう苦むせら。か

いりの流と出流せよ。

夕虫のよらうらうせ流あて人あれた。いりあふ

源氏のあひの世のあつらよと。今う室ふよるいといひ

いき。又、鬼の形とい河原、流山と夕虫のあつらひ

一時ううふ化一う女のうらうとていふよる。

流くあそり一とて鬼の形とら。夕虫、あふ流。

又、鬼をといえんとて。鬼乃形うらうの流とらけら。

河原、流ハ融不流と

▲あよあふ 何ゆふ治と

▲我ももを後乃ふの者その玉着のあつらと

頭の中ゆ夕虫のよふかといひ治ひと。玉着のあつら

さゆり。ちあの高のあつら女とて者肥前、あつら

玉着のあつらと具一とてあつらあつら一と。あつら玉

葛よ流る。徳のふくむはふより出るる傳る  
まじ。玉尊乃むうりたうとく。夕鳥の世うと  
お流る流るやとてんてん

夕鳥の流るるえ流るいー世流ると  
末摘花をえね

あうごりー夕鳥乃あふあくまうとく  
玉尊あてん年月あうとぬまてあうごりー夕鳥の  
あまは流るりどとく

源氏源氏のお流る言ふ幽艶とわうとく理浅く不  
似うりとりたふ菩提らととくめく。後と不流し。  
流るの流るも流るつとん

源秘抄云言葉幽玄義理甚深矣

秘抄之序云 著系云傳 我々の玉室紫衣の源氏  
物語ハ公河内玄少とて其源ハ

明星抄云此物語一部の大意而よの好色妖艶と云  
と建立せりといふ。作者の本意人といふ仁義  
の孝の乃小川つと。流るハ中乃実おの物語と情  
うめく。出世乃菩提根と云流るハ一とて。うら  
河海もて流るの更。仁義の乃。好色の媒。菩提の  
源ハあつとて。是をこのせとて。うら

岷江入楚云一部之作意比天台四教之法門  
又云此物語ハ盛者必衰會者定離生老病死有為  
轉衰の理を源くあめと。此ハ不流とく世間相常住

之注文を以て。煩惱即善提。生死即涅槃の旨を明  
す。煩惱即善提之文は。物徳之大意也。

柞の字ハ高砂小波也。源氏物語ハ源氏供養小波と

申すも此夕顔の事ハ終不務まくとありまなる情のゆゑに  
夕顔の事ハ第一巻の第二の事也。初巻桐壺より  
ハ記す也。此夕顔の事ハ河原流して果終る  
とある所不務まてありし事といつつけり。此夕  
の娘終あしく世徳の本文の下にて記す

▲終る終ひ一六条乃御息所不カキ通終る事と云ふよりし

中宿小 六條の御息所ハ野宮不波と云ふは後

之。中宿といハ惟光が母大貳の乳母の家也。

夕顔此の夜露乃洞よと。六条と云ふの由志のひら  
りとの比。うらよりまうで終る。中宿り小大貳のめ  
のこころはひと。尼小あふるらうりんとて。六条  
のり家母のかりし下畧 源氏の事六条の御息  
所不より終る。大貳のめのこころ終る。あ  
りし事。此あよりと云ふ。又夕顔ありし事と  
源氏物語とそとれより終る。す終り終る也  
▲只やと云ふの玉降乃終り小より一は車あり

は車といハ源氏の終る終る車也。夕顔此は御車ハ  
あつと門のさうり終る。人して惟光めよせて。  
まを終るなり。又。同上不源氏の事不



「夕蔭小いもくむ玉降乃俊小見しえ小結をたれ  
三光院及流云玉降乃俊も見し縁ふいうれく。夕  
蔭小苑の窓々の時小あふるとこ。夕蔭の美乃らと  
合めり。玉降ハ乃の枝河之。玉降と平泳むりる  
状、相溶如こく。玉降の乃つとらるる。夕蔭乃を  
玉降の乃のうらふらふらふり小あり我小あひつる

詞林宗系抄云玉降の乃と云々。昔ハ刀を持つ  
すくらし。降をのつとらるるををををを。乃の云  
具とせり。人の玉入くハ妻戸小立よせく。玉降ハ  
但し乃をお傳よハ降ハ靴有り。柄あり。こあり。心  
とハ玉降乃とつとらる。靴とつけらる。玉降

集十一卷云

「玉降くらしく。玉降をらる玉降の里人らふら見ぬ。乃の  
をををを。つとらる。右方の御如斯。已上  
其外亦多小玉降乃乃つとらぬ。亦も多し。畧云  
榻嶋曉筆云玉降の乃と云々。住吉記云昔降を  
乃を小立く其降の乃り十方へさく。其、老小見  
て流云七乃を多し。乃り。依之玉降の乃と云々  
神代直指抄云天瓊矛と解云玉降の乃の乃と云  
熟、流もせり。二神ゆと云々。乃と云々分は  
て。乃と云々。統志流云く

▲乃乃あやめと見ぬ。乃の乃の乃の乃のつとら  
乃

晴かすくくらの花の名もえあしむぞ見たり夕暮乃  
 夕顔をえりのゆくさるをえん夕暮してP作る。む  
 の名い人のこころうあやうと地縁よらんゆり  
 とP. 夕暮して小窓からふじゆりうらさるる夕暮の  
 このもふのあやううららむらむらひてさく  
 又、同くえく相のあめえはゆくとくさく人もゆめ  
 るくらのあやうく。らうりうりうらさるる夕暮の  
 とくしうく 河海抄小文目録<sup>アラマ</sup>後と云 孟律抄よ  
 續目録<sup>アラマ</sup>白と云 友今景雅抄云後同くハ綿ぬい  
 りのせはく文<sup>モシ</sup>うさ相いさくや。細<sup>チヌ</sup>の目。綿<sup>チヌ</sup>目。  
 布<sup>チヌ</sup>目うく相の色あり。見ぬ時ハ。後目もくくつと

ちぬく。夕暮のうくくうららむらむらと。相のあやめ  
 うぬさるうくく えあしむくくく。相ハ。見ふうらく  
 むうりうき。えもゆれとくも。たぐりうゆも。あ  
 けさくとも。縁ありぬともさく。今夕暮ふつるハ  
 ありうらさく  
 ○真<sup>チヌ</sup>心乃あづうらうふれつらんああもあは名<sup>チヌ</sup>のあやう  
 ○<sup>チヌ</sup>うらうのあやうらうあづうらうあはもえあひぬさる  
 へん  
 ▲心乃色ハゆき乃情<sup>チヌ</sup>とさくくらのあは乃  
 ○古<sup>チヌ</sup>心乃情とさくくらのあは乃のあは乃のあは乃  
 国<sup>チヌ</sup>の麻乃色ハふれうい小秋乃あづうらう  
 沈<sup>チヌ</sup>煙<sup>チヌ</sup>好<sup>チヌ</sup>がちるあくつらう。又夕暮のらあくのあ

と扇ふきく源氏小まうし。りのらせもあくとせさる

▲藤原の乃乃やうしのこののまも

ふのめハ安宅を渡と。夕顔を小源氏のふふ

「たーもうくやハ人のまひらんまのまひらんめつめつめ

▲こうなうりからヒコハヒ蝶ヒコハヒ乃今うけなる程もろく

此等ハ文貞の乃乃とせとせ。蝶乃古千壽中後と

曾祿好忠家集云ひとほ乃目をそり。まふのまの

風と海程のまの。あしの池よりも強ふ。ま乃多中と

こしあしとせと。小夜の寐さあえ。夏原長基すて

人の乃ハ船歌の家づらとまひをまの湖の命。

夕とまの思相り。のーとせ

▲宵のるさうたの乃松のひさもあそり。く

夕顔を云夜中もさふらん。凡やあうくまう

吹うらひ。よーとね乃ひとよ本源くましてとせ

▲凡よまうくとり。火のまゆりとおふん。て

同まを云火ハかのふまうとせと。あのをさふまう。

扇風のうさうら。このくまうく。まを移してと

是あま河原流少と。夕良の果抄ひ。一時の須と

凡よまうくとハ凡ふえからうめくう人乃月とせと

とらやうらるせとふ

建長七年百と

。おまを何あ。るのうり源のさ一夜凡よまうくとまのやう

▲あうらまうればうむまの園の凡乃人ものう

是も夕齋の星流不射のふとどり。くも玉の偏光  
吐くまの雲の流乃きりなる愛おしくもよきうさりなる

いふせんとうおひ川うさり人いしと消くゆぬぬの  
清とのこ 淮南子註云沫雨雨潦上沫起若覆盆

万葉小未必歌方とせ 綺語抄云ぬのたまりと

うさりりのやうふらりせうさうさうさうさうさう

奥義抄云うさうさうさうのよふつがのやうさう

さうさう沫し又 河まうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさう 万葉小未必抄云うさう

いささささうさうさうさう 袖中抄云あまのこの

あまのこのさうさうさうさうさうさうさうさう

せひさうさうさうさうさうさうさうさうさう

詞林采葉云せん達とあさりんとさうさうさうさう

さうさう 万葉源云うさうさうさうさうさうさう

ぬんさうさうさう

後撰 〇さひ川池と流々ぬの流乃さうさうさうさうさう

光廣は詠歌大概云は 万葉のふたつを。一よの仲子と

云男の有りが。伊勢がたふさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう



万巻ふは教ラまよと云

○里ハあきそくハ古ちり者なるはたもそく病扶の世なる

又馬ウこつぐなる乃く病又 同書と云く病こつぐなるの

うくたふ小鳴るると云く。 祇いさうく病たふと云

るまぬうくひうの声く病

▲優婆塞ウがわとらふ乃をとらふよとて来世ユシヨも法を病修り

絶と云 同書小源氏の云く。 ありハ修りたうふ

く。是ハ夕食の宿小源氏のと云り法病の方よ。

こつぐと云くドする人のつこめのなると云て病よ

るく。 佛ブツハに教の中ブツあり。 優婆塞ハ其一也

釈氏要覧云優婆塞ウ言善宿男ホシ謂離破戒宿ラ破

あけがさのきうウ

花ハナんとして去りウくくると。 けけがたユ

くま。 あけられ法ホウと云けけがたのユ

花ハナもまゑぬる色のやどユゆと云くユ

文選ブツハ昧爽マクと云

○いけへの秋乃夕のきユふ今ユくユしユぬるユのユ

